



FLA-P

今年度の活動について

文責 小清水町立中斗美小学校 吉本 隆

1 チーム立ち上げのきっかけと目的

(1) 新指導要領の移行期

今まで各小学校の外国語活動においては、多くの学校で取り組まれていたものの、各学校における時間や内容については、かなりのばらつきがあった。

新しい指導要領が示され、教育の機会均等の確保、そして中学校との円滑な接続の必要性から、平成23年度から全ての5・6年生で年間35時間の授業時数が確保された。

このことにより、全ての小学校で一定時間の授業を行うという枠組ができたと言える。しかし、どんなことをやっていけば良いか、どんな課題があるのかなど、まだまだ内容としての道筋が見えぬまま状態でもある。平成21年度と22年度は移行期間として、各学校に外国語活動の時間を任せられている。今年度はまさに、23年度からの完全実施に向けて、一番重要な時期であると言える。

(2) 国際理解教育としての観点から

新指導要領が打ち出した内容はこれとリンクしているが、国際社会を生きていく為に求められる人材を育成するため、文部科学省の「初等中等教育における国際教育推進検討会」報告書では、国際社会で求められる態度や能力について、次のように述べている。

- 国際化が一層進展している社会においては、国際関係や異文化を単に理解するだけでなく、自らが国際社会の一員としてどのように生きていくかという主体性を一層強く意識することが必要
- 初等中等教育段階においては、全ての子どもたちが、①異文化や異なる文化をもつ人々を受容し共生することができる態度・能力、②自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立、③自らの考えや意見を自ら発信し、具体的に行動することのできる態度・能力を身に付けることができるようにすべき

まさにこのことは、我々が目指している子ども像、

- よりよい未来のために、地球市民として、ともに行動する子ども
 - ・身近な物事と世界とのつながりに気づき、そこに内在する問題を見だし、進んで追求していく子ども
 - ・異なる文化の人々とも進んでコミュニケーションを図ることのできる子ども

に直結する部分であり、主題に迫っていくものである。

(3) 本研究会主催のプロジェクトとして

上記のような見地から、本研究会では今年度、小学校外国語活動の研究に重点を置くこととし、管内小学校の外国語活動の発展に寄与することを主目的として、本プロジェクトを立ち上げることになった。

メンバー構成

国際理解教育研究会の会員、管内全体の教員にも声をかけ、20数名のメンバー構成となった。

本プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的を、次のように設定し、研究を進めることとした。

- ◎ 本研究会の柱である国際理解教育一つの活動である、「小学校外国語活動」の研究を行い、管内の小学校外国語活動の発展に寄与する。
- ① 今年度から移行措置として小学校に導入され、実際に行った授業における、小学校教師の悩みを解決したり、問題点等を追究したりする。
- ② チームメンバーが実際に授業をしたり、他の教師の授業を見たり、研究会や書籍等で学んだりしたことについて交流する。
- ③ 本研究会の公開研究会等に関わる外国語活動の授業を作り上げ、授業公開を行い、広く管内に発信する。
- ④ 「小学校外国語活動」の研究を進めながら、中学校における「外国語」との連携を図り、より望ましい活動を追究する。
- ⑤ 管内教師の明日からの授業に活かせるよう、本チームの活動をホームページ等で広く発信する。

活動の経過

今年度の活動は4回の活動と研究会とし、次のように計画を立てて行った。

- ・ 6月27日(土) 第1回ミーティング 本プロジェクトの目的と計画
- ・ 7月25日(土) 第2回ミーティング 公開研究会に向けて
- ・ 9月4日(土) 公開研究会
- ・ 12月5日(土) 第3回ミーティング 活動レポート交流
- ・ 1月16日(土) 第4回ミーティング 反省・次年度に向けて

2 活動の概要

(1)各学校での課題

第1回ミーティングではこのプロジェクトチームの目的を確認し合った後、日頃の実践や課題について話し合った。そこでは様々な実践や悩みなどが出された。

○児童像

- ・外国語活動を通して、どのような児童を育てていくのか。
- ・今までやっていた総合的な学習の時間と外国語活動との目標の違いがあり、今までやっていた所は戸惑う。

○カリキュラム

- ・「英語ノート」をどの程度扱っていったら良いのか。
- ・低中学年と高学年との系統性はどうするのか。
- ・複式校でのカリキュラム(シラバス)はどうしたら良いのか。

○教材教具

- ・絵カードなど、教材作りに時間がかかる。
- ・電子黒板の導入と使い方について、見通しが立っていない。

○指導方法

- ・言語を扱う活動であるが、どの程度文字を取り扱っていくべきかが見えない。
- ・オールイングリッシュ、クラスルームイングリッシュなど、担任の英語をどう使っていたら良いかわからない。

○異文化理解

- ・英語活動ではなく外国語活動ということで、どの程度英語以外の言語や文化を取り入れていくべきかわからない。
- ・外国語活動は全て国際理解教育だということも言えるが、本研究会として、ただ外国語活動だけをやっていて良いのか。

○評価

- ・評価の仕方がわからない。
- ・外国語活動は楽しければ良いのかという疑問がある。
- ・「慣れ親しむ」という面の評価が難しい。

○担任主導

- ・今までALTにかなり頼ってきたところは、担任が主導するという形は抵抗がある。
- ・校内の先生方の間で温度差がある。

○ALT等の活用

- ・ALTに言いたいことが伝わらない。
- ・ALTと毎時間打ち合わせる時間が取れない。
- ・外部人材(民間団体、ボランティア等)の活用や関わりはどのようにしたら効果的か。

○教員の研修

- ・2年間で30時間の研修が推進されたが、なかなか時間が取れない。
- ・誰がどのように研修を進めていったらよいかわからない。

○中学校との連携

- ・どのように連携をしていくべきか、ゴールが見えず、なかなか進まない。
- ・お互いに忙しく、交流する時間が取れない。

このように課題や疑問点は多岐にわたり、すぐに解決できることではないものばかりであった。ただ、ここで課題等が明らかになったことで、これらの課題を今後の授業や研修などで、答えとなるものを見いだしていくことが大切ではないかという確認がされた。

(2) 授業作り

本研究会主催の管内研究大会に向けて、本研究会研究部を中心に計画され、今年度の研究会は、外国語活動の授業を中心とした研究会とすることになった。そこで本プロジェクトチームと本研究会研究部が共同で授業作りに携わることとなった。

授業は会場を網走市立南小学校、授業者は高田佳奈先生が行うこととなり、高田先生の授業作りをサポートしていくこととなった。

1回目のミーティングから話が出され、活発な論議がなされた。高田先生がやってみたい活動や単元、そして児童の実態などを話し合いながら授業の構想を話し合った。

その後2回の話し合い、研究部会を通して、授業の細案をまとめていった。

授業について

今回の授業について、高田先生が一番大切にしていたことは、

学級作りとしての外国語活動

である。

高田学級では、高学年特有によく見られる、女子のグループ化、男女の隔たりなどが見られるようになっていた。そこで高田先生は、何とかいつも仲の良い友達ではない子ども同士で、楽しくコミュニケーションを図ることができないかという願いがあった。

そこで、活動の中にグループで協力して何かをさせることによって、「一緒に活動して良かった」、「友達と理解し合えた」など、人と人が理解を深められるような活動にしたいと考えた。そしてそのことにより、学級の間人関係を構築していく一つの活動にしていくことをねらっていた。

活動内容の工夫

具体的な活動の様子については、別紙指導案及び反省を参照されたいが、具体的に授業の中では、

- グループの構成の仕方を担任が意図した組み合わせにする。
- グループの友達同士での会話を必然的に仕組み、互いのコミュニケーションなしには活動が成立しないように工夫する。
- 担任の支援としては、うまく活動できていない子にサポートし、やってみようと思えるようにその子に合った声かけをするように努力する。

などの工夫をして授業に臨んだ。

担任主導の意義を感じた授業

いよいよ研究会当日となった。実際の授業では、和気あいあいとしたクラスの雰囲気の中で、教師児童ともに笑顔が絶えない授業となった。子ども達はグループでの活動ということでお互いに助け合いながら活動していた。

その後研究協議が行われた。参加者から様々な感想や意見が出され、とても充実した話し合いとなった。その中で、助言者の富田指導主事や参加者の中から、

- ・担任であるが故にできた授業であり、学級経営につながる活動となったこと。
- ・個別支援の仕方が良かったこと。
- ・教材の準備の大切さや工夫が授業で活かされたこと。

など、たくさんの良かった点が出された。

また、細かなテクニックや、「買い物」という活動を更に工夫することによって文化として伝えて行けたことなどの課題も出され、次に参加者の先生が授業する時に活かすことができるポイントを得ることができた。

(3) 目標について

授業を作っていく時に、まず私達が一番に考えなければならなかったことは、単元の作り方とその活動の目標である。本研究会としての外国語活動としての目標の観点がまだ示されていなかった為に、ここで再認識することとした。

まず、小学校外国語活動の目標は以下の通りである。

<外国語活動の目標>

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。
(学習指導要領より)

この目標は具体的にすると、大きく次の3点を踏まえながらコミュニケーション能力の素地を養うということである。

- ① 言語や文化について体験的に理解を深める。
- ② 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ③ 外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

一方、本研究会では、国際理解教育としての外国語活動のおさえとして、

外国語活動を通して、異文化と出会い、「地球市民」として生きる力を身に付けていく

ことをねらいとしてきた。異文化との出会いを通して、たくさんの文化があることを知りその「違い」や「よさ」に気づきながら、互いに尊重し合う。言葉を通して人と人とはきく結びついていくことを知り、人ともっと話したい、自分を表現したい、思いを伝えたいという子ども像をめざしてきた。

まさにこのことは上記の①に大きく関わる部分であり、

児童のもつ柔軟な適応力を生かして、言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うため、国語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深める
(学習指導要領解説より)

ことにもつながる。

よって本研究会としては、外国語活動の授業として①を中心とした観点を国際理解教の分野として重要視しつつ、外国語活動の授業として大切な上記の3つのねらいに即した次の3つの観点とすることとした。

- ①「言語・文化への体験的理解」
- ②「積極的なコミュニケーションへの態度」
- ③「外国語の音声や表現への慣れ親しみ」

この3つの観点を授業を行っていくことを確認したことにより、望ましい児童像や評価方法などがはっきりと見えてきた。

(4)各レポートの交流

第3回目のミーティングでは、それぞれの会員の先生方が今年度実践してきたことや研究したこと、あるいは文献などを読んで得た情報などをレポート交流という形で行った。

具体的には別紙各先生方のレポートを参照されたい。

3 成果と課題

(1)成果

- ・各学校の実態を交流することにより、今各校でかかえている悩みや課題などを明らかにすることができ、外国語活動の分野で本研究会が探っていくべき方向性が具体的に见えてきた。
- ・授業作りを授業者を中心としつつ複数で考えていくことにより、あらゆる児童、あらゆる規模の学校を想定しながらシミュレートすることができた。
- ・外国語活動としての本研究会としての目標を改めて考えることにより、はっきりと目指す児童像が見えた。
- ・各校で研究したことをレポートを発表し合い、そのことについて参加者で練り合うことにより、外国語活動の授業における研修を行うことができた。

(2)課題と課題解決の方策

- ・各校の課題を交流し、それについて研究しながら課題を解決していく道筋はできたが、少ない回数でのミーティングではなかなか深まりが得にくかった。
- ミーティングの回数を増やすことは難しいので、それぞれの課題を年度当初に明らかにし、そのことに向かってそれぞれ研究していくという見通しを持つような研究方式にしていく必要がある。
- ・授業作りでは、研究部と本プロジェクトとの連携がうまくとれなかった。
- 外国語活動の授業作りをしていくのであれば、研究部とともに授業を作っていくことも可能である。効率的に行っていく必要がある。
- ・今年度は外国語活動の目標についての理論研究が行われたが、評価や活動内容、支援方法など、本研究会として確認していかなければならないことがある。
- 次年度は年度当初から年間の見通しをしっかりと持ち、研究を進めていく必要がある。